【保育学科　創作発表会 30 回特別企画】

下関短期大学保育学科「創作発表会」を振り返って

―― 卒業生11名の感想文を中心に ――

堀尾昇平・高杉志緒

【Special Project: 30th Annual Presentations】

Presentations deemed socially beneficial, open to the public.

Looking Back Through our Presentations

― Centered on Reports from 11 Graduates ―

Early Education and Care Department Shimonoseki Junior College

by

Syohei Horio, Shio Takasugi

1　はじめに―保育学科卒業生アンケート実施と本稿の趣旨―（担当教員：堀尾昇平）

「第３０回記念保育学科創作発表会」（仮）「発表の思い出」寄稿のお願い**締切１１月１０日（金）**

発表会を始めて 30 年が経過しました。（平成元年（1989）～平成２９年（2017））そこでこの度、今迄の活動を振り返り、未来の学生に伝える為、皆様の言葉を募る企画を立てました。発表した内容、工夫したことに関する思い出、企画倒れになってしまった発表など色々な思い出があると思います。今だから話せる話などお聞かせください。

また児童研究部部員として、又は有志参加・ゼミ生として中・四国保育学生研究大会に参加した思い出などもお聞かせいただけたら嬉しいです。

なお、この原稿につきましては、ご本人に確認後、本学創作発表会時に発行します要旨集（１２月発行）と、本学紀要（平成３０年２月発行）にも掲載する予定です。

投稿者・文章内氏名等はご希望により匿名やイニシャル等で掲載する予定ですのでよろしくお願い致します。

１　創作発表会（平成　　年度発表、題名など　　）			
２　中・四国保育学生研究大会（平成　　年　　大会発表、発表内容　　）			
３　チャリーティショー、ボランティア活動発表等（平成　　年、発表内容　　）			
氏　　名		卒業年度　　年	匿名希望有無
連絡先（電話、メールアドレス等）			有　・　無
現在の状況等お知らせください（他コメント等）			

図１　創作発表会に関する卒業生アンケート用紙

下関短期大学保育学科主催の創作発表会は、昭和 63 年度（1988）に第 1 回を行い（1989 年 2 月 4 日開催）、以降毎年 1 回開催してきた。平成 29 年度（2017）、第 30 回を迎えるにあたり、1）今までの活動を客観的に振り返り活動状況を記録すること、2）保育学科卒業生の学習成果を把握して社会貢献できる人材育成につなげること、以上 2 つの目的のもと「創作発表会」に参加した卒業生の言葉を募る企画を立てた。

アンケート用紙は、企画者（堀尾）が作成した（**図 1**）。質問事項は、1. 創作発表会について、2. 中・四国保育学生研究大会について、3. チャリティショーおよびボランティア活動発表について、4. 現在の状況（他コメント等）、以上 4 つとした。創作発表会以外につい

ても質問を行ったのは、創作発表会が、中・四国保育学生研究大会（主催：中・四国保育士養成協議会、年1回12月第1週目土曜日を中心に開催）をはじめ、チャリティーショー（主催：本学保育学科、平成6年度第13回で終了）あるいは児童研究部（顧問：堀尾昇平）の社会活動と関係しながら継続してきたと考えるためである[(1)]。

対象とした卒業生は、平成元年度（1989）～28年度（2016）、保育学科卒業生の内、児童研究部あるいは縫いぐるみゼミナール（指導教員：堀尾昇平）に所属していた者を中心に約100名とした。アンケート方法は、平成29年10月第1週目に各自に紙面で送付し、個別に記入の上、11月10日を締切日としてファクシミリ・郵送等で回答してもらった。アンケートを実施した結果、12名11組（内2名は現在夫婦関係）の卒業生より回答を頂いたので、次章で報告する。

2　保育学科卒業生によるアンケート回答について（担当教員：高杉志緒）

保育学科卒業生アンケート回答者が記載した文面を以下に報告する。なお、回答の掲載にあたり、下記の点に配慮した。

・質問事項は4つ（1創作発表会、2中・四国保育学生研究大会、3チャリティショー・ボランティア活動発表等、4その他近況報告）であるが、1項目のみの回答者もいた。その場合は、記入箇所の設問と文面のみ記した。
・掲載順は、卒業年度順とした。2. 中・四国保育学生研究大会については、参加大会の開催場所と発表題目を付記した。
・本人の希望による公表時の匿名希望者は、卒業年次とイニシャルを記入して紹介することとした。
・誤字・脱字・語句の誤用は、適宜、編者があらためて掲載した。
・文体（敬体・常体）は依頼時に指定しなかったため回答者の原文表現を尊重し原文通り掲載した。
・回答者の在学当時の様子が分かるよう関連する写真を選んで本文中に付した（回答者了承済）。

以上が掲載上の留意点である。次に、保育学科卒業生のアンケート回答（12名11組）を報告する。

①【平成8年（1996）3月卒業　香西由香子】

1．創作発表会について（平成6年：合奏、平成7年：合奏）

児童研究部員は、中・四国研究大会が終わってから2週間前後で、創作発表会の本番を迎え

ます（写真１）。

他の教科の勉強や学年末試験が控えている中、両方の練習を限られた時間でこなしていくのは大変でしたが、今、振り返るといい思い出です。

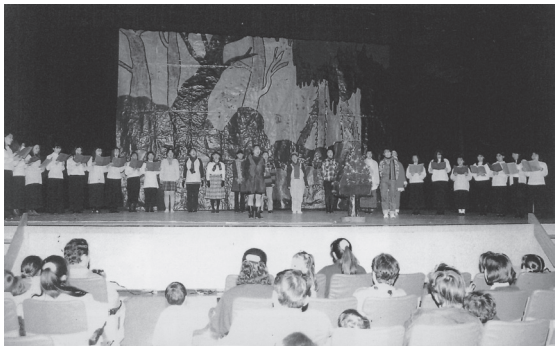

写真１　平成７年創作発表会　合奏班発表風景

2. 中・四国保育学生研究大会について（平成６年：岡山市民会館　影絵「交響曲＜シンフォニー＞」、平成７年：徳島市民文化センターブラックシアター「西遊記」）

児童研究部として参加しました。岡山大会は、先輩方が教えて下さるとおりに動きました。先輩に頼っていたため、私が部長になってからの徳島大会は、汗と涙と感動のトライアングルでした。12分間の演技でしたが、私の大事な宝物です。ありがとうございました。

3. チャリティーショー、ボランティア活動等（平成６～７年　お誕生日会、クリスマス会など）

下関短期大学付属幼稚園のお誕生日会をはじめ、施設の文化祭、クリスマス会、下関市主催の行事に参加させて頂きました。社会人になって、学生時代にいろいろ参加していた経験が心の糧になっています。

4. 現在の状況・コメント等

（現在）事務の仕事をしています。短大で学んだことは職種が違っても役に立ち感謝しています。

②【平成13年（2001）３月卒業　Ｈ・Ｉ】

1. 創作発表会について

創作発表会では、それぞれが希望する分野にわかれ（器楽合奏・ブラックシアター・ダンス・ぬいぐるみ劇）、様々なテーマをもとに音楽や造形で表現をし、子どもたちと共に学生が表現空間を作り上げる本学独自の素晴らしいイベントです（写真２）。学生自身が、企画・運営をし、苦労もありましたが、やりとげた後の達成感はとても最高でした。

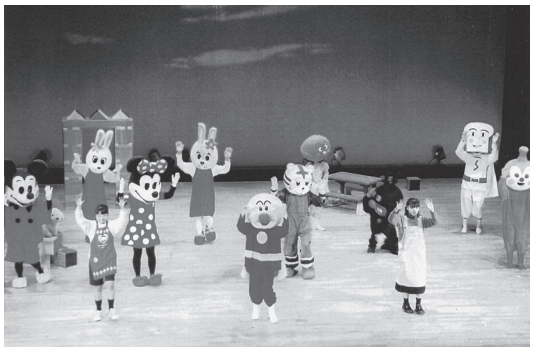

写真２　平成12年創作発表会　縫いぐるみショー発表風景

2. 中・四国保育学生研究大会について（平成11年：防府市公会堂　着ぐるみ創作劇「The realities of life」、平成12年：倉敷市民会館着ぐるみ創作劇「でたらめ?!―キティちゃんがパンダ大魔王の毒牙に―」）

中・四国大会では、毎回「ぬいぐるみショー」を行っていましたが、内容はその年々で違います。台本、音響、道具など、それぞれが得意な分野で活躍をして、何度も話し合いを重ね、練習をしました。特に縫いぐるみを着ると視界がせまく、動きにくくて、セリフ役と動きを合わせるのにとても苦労しました。みんな色々な思いはありましたが、成功させようという気持ちは同じで、より一層部員同士の絆が深まりました。同じ目標を持った仲間と一緒に、泣いて、笑って過ごせた2年間は私の宝物です。

③【平成16年（2004）3月卒業　冨松豊、冨松（徳海）成江】

1. 創作発表会について

創作発表会も始まって30年になるのですね。とてもすごいことです。これも先生方と学生が一致団結して取り組んできた賜物だと思います。創作発表会の思い出は、本番よりも練習の方が残っています。メンバー全員が一つになるというのは、なかなか難しく、リーダーも大変だったと思います。練習を重ねるうちに徐々にメンバーも一つになり、本番では大成功だったと思います。

2. 中・四国保育学生研究大会について（平成14年：島根県民会館　ブラスと縫いぐるみによる劇表現「Voice」、平成15年：高知県民文化ホール　ダンス「Shall we dance ？」）

中・四国大会は1年のときは松江で、2年のときは高知でありました。この大会に参加して良かったことは、他校の学生と盛り上がることができたことです。発表では、固いものだけじゃなく、明るく楽しいものも多く、実際に私たちも女装して踊ったり、劇をしたりして、とても盛り上がりました。そして何といっても、ちょっとした観光もできるので、特に私の時は松江・高知だったので、旅行気分で楽しむこともできました。

3. チャリティーショー、ボランティア活動等（平成14～15年　お誕生日会、クリスマス会など）

児童研究部では、いろいろな園、施設、イベント等に参加しました。その中でたくさんの子どもたちや障がいのある方とふれあい、とてもいい経験になりました。一番の思い出は、「山口きらら博」（開催期間：平成13年7月14日～9月30日）の「一年後祭」で、速水けんたろうさん（NHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」8代目うたのおにいさん）の前座をしたのですが、ジャンケン大会ですごく時間がかかって、けんたろう兄さんのショーの時間が遅れてしまいました。とても申し訳なかったです。

4. 現在の状況・コメント等

現在は夫婦共に保育の仕事をしていないのですが、短大時代、そして実際に保育現場で働いた数年の仕事は、今でも忘れることの出来ない経験になりました。

④【平成 18 年（2006）３月卒業　戸高翔太】

1. 創作発表会について（平成 16 年：合奏、平成 17 年：ダンス）

ダンスは苦手です。人前で踊るなんて、恥ずかしくてたまりません。自分は当初、ブラックシアター班か縫いぐるみ班を希望していたのですが、ダンス班に配属されてしまいました。発表会の班分けは、希望者が多い場合、先生方の抽選・割り振りになっていたので、仕方なくダンスを踊ることになりました。仲良しの友人と２人、不安をぬぐえぬまま、ダンスの世界に足を踏み入れた事を、今でもよく覚えています。初めてのことばかり。練習は大変でしたが、楽しかった！

本番、大勢の人の前で踊るのは、やっぱり恥ずかしかったし「へたっぴ」でしたが、楽しかった！　これで終わっちゃうのが寂しかった（**写真 3**）。そんな風に思うようになるとは、最初は想像もしませんでした。理由はひとつ。一緒に切磋琢磨した仲間がいたからです。いい出会いをしました。

写真３　平成 17 年創作発表会　ダンス発表風景
（向かって右端が戸高翔太）

ダンスは苦手です、今でも。人前で踊るなんて恥ずかしくてたまりません、今でも。しかし、あの時の私は、ダンスを踊って、そして素敵な仲間に恵まれた。苦手なことにチャレンジする、その意義を学んだ気がします。創作発表会、楽しんで下さい！　そして、素敵な出会いを大切に！

⑤【平成 22 年（2010）３月卒業　濱田英司】

1. 創作発表会について（平成 20 年：心理ゼミナール　口頭発表「子どもの遊びの特徴と保育者の関わり」、平成 21 年：伝承遊びゼミナール　「1 分間の昔イイ話」）

今から９年前、私が保育士を志す下関短期大学保育学科の１年生であった当時、保育現場での子どもたちの様子や実際に子どもたちと関わることに関心があったため、子どもの心理や発達面での特徴を研究するゼミナールに所属していた。当時から市内の某保育園（現認定こども園）にご縁があったため、創作発表会で口頭での個人発表をするということが決まった時から、保育施設で実際に子どもたちの姿に触れ、保育者としての自分の考えをまとめた発表がしたいと考えていた。そのため発表に向けて前期のうちから授業などを通じて子ども理解に努めた。

そして、夏休み期間中であった８月から９月の時期に、16 日間にわたり実際に園を訪問し

て子どもたちの遊ぶ様子を間近で観察し、時に一緒に遊ぶなどして印象的な場面を中心に記録をとっていくという作業を行った。前期のうちに大まかな発表内容については計画していたが、それらの夏休み中に収集した情報を基に、後期に入ってからゼミの時間を中心に苦手なパソコンと向き合い、まとめていく作業を続けた。

発表当日は、パワーポイントを用いて順を追って読み上げる形で行った（図 2）。発表資料の制作には簡単なエクセルでの表の作成や、図形の加工などが含まれており、担当教員に何度も質問したり仲間たちと励まし合ったりしながら作業を進めていったことを覚えている。その結果、発表準備に予想以上の時間を要したものの、満足のいく仕上がりとなり、当日も自信を持って発表することができたことで、大変かけがえのない経験となった。

＜事例4＞　保育士による観察
5歳児クラス（きく組）
「子どもの自発的行動を促す保育者の受容のあり方」

お遊戯室で遊んでいるとき、Yくんが泣きながら「Mくんがね、おもちゃを壊してくる」と訴えてきた。私はMくんのところへ行き「Yくんが、Mくんがおもちゃを壊してくるって言ってるけど…」と、Mくんの顔を、そうなの？という気持ちで覗き込んだ。Mくんは黙っている。「本当？」と聞くと、小さく頷いた。「Yくん嫌だよね」とまた顔を覗き込む。Mくんは黙っている。Yくんは私がMくんに話をしたことで満足したようで、どこかへ行った。「Mくん、嫌なことがあったんだよね。何もないのにMくんは嫌なことしたりしないもんね。」と言葉をかけると、ずっと黙っているので、「お話できそうになったら教えてね。」と言って、Mくんのそばを離れた。
Mくんはしばらく一人で何かを考えているようだったが、その後私のところへ来て、「Yくんは何もしてない…」と教えてくれた。私は、Mくん自身、充分にしてはいけないことをしたということを反省したのを感じたので、「正直に話してくれて、先生は嬉しいよ。遊んでおいで。」と言葉を渡した。Mくんは安心した様子で、お友達のところへ走っていった。

＜考察＞
～保育者としての関わり方～

5 歳児

⇒物事のきまりの中で遊びを展開し、発展させることができるようになるため、自分たちで作り出したルールやイメージをよりいっそう広げていくよう促すことが必要となる。
また、日常生活でのあらゆる事物の性質や存在に興味を持ち始めるので、子どもたちが抱く疑問に耳を傾け、新しい発見を導き出すような取り組みが求められる。

図 2　平成 20 年創作発表会　心理ゼミナール発表資料
「子どもの遊びの特徴と保育者の関わり」
（全 16 枚の内 2 枚）

しかし 2 年生に進級してからは違うテーマでのゼミ活動をしたいと思い、伝承遊びゼミナールに所属した。

伝承遊びゼミナールは、その前年まで主にパネル展示での発表を行っていたが、活動を進め、創作発表会での発表内容を決める時期になると、メンバーの中から「ステージでの発表がしたい」という声があがり、伝承遊びなどに関連するテーマでステージ発表を行うことに決まった。

内容については、メンバーそれぞれが異なるイメージを持っていたため、当初はなかなか話がまとまらず、平行線をたどっていた。しかし話し合いを進めていく内に、次第に「大人も子どもも楽しめる劇のような発表がしたい」事、また「テーマとして日本に古くから伝わる昔話について演じてみてはどうか」という考えに皆がまとまっていった。最終的には、メンバー全員で多数決をとり、どの昔話をテーマにした劇をするのか考えたが、ここでも希望が分かれてしまい、なかなかまとまらなかったことを覚えている。

そうした中「皆が演じたいテーマが複数あるのであれば、発想を変えて、限られたステージ発表の時間内で複数の昔話を次々に演じてみてはどうか」という意見が出た。さらに、時を同じくして、その年の春から日本テレビ系列で放送が開始された『人生が変わる１分間の深イイ話』というバラエティー番組がヒントとなり、昔話のあらすじを要約して１分間でナレーションとして読み上げる『1分間の昔イイ話』というテーマに決定した。

テーマ決定後も再び話し合い、特に人気の高かった「うらしまたろう」「こぶ取りじいさん」「はなさかじいさん」「ももたろう」「サルカニかっせん」「カチカチやま」「うさぎとかめ」「おむすびころりん」「いっすんぼうし」「泣いた赤鬼」の合計十種類の昔話を連続して１分間ずつ演じていく寸劇を行うことにした。

当日の発表内容は、登場人物が多い上に、一人ひとりの出演時間は短いため、一人一役から二役を担当し、登場人物・動物を描いたボードを持って立つというシンプルな登場方法と演出内容に落ち着いてしまった（**写真 4**）。しかし、ナレーションが駆け足であらすじを読み上げながら、登場人物が目まぐるしく入れ替わるという「やりたいテーマを全て盛り込んだドタバタ昔話寸劇」は話し合いや制作、リハーサルから当日の発表に至るまでの全てが、学生同士で意見を交わし合いながら作り上げていったゼミ活動として、今でもとても良い思い出になっている。

写真 4　平成 21 年創作発表会「一分間の昔イイ話」発表風景（向かって右端が濱田英司）

2.　中・四国保育学生研究大会について（平成 21 年：海峡メッセ、当番校下関短期大学総合司会）

今からちょうど８年前、私は本学が当番校を務めた第 50 回中・四国保育学生研究大会に当時保育学科２年生の学生として参加し、当日は開催会場であった海峡メッセイベントホールのステージで、1,000 人以上の保育学生・教員が集まった中で司会をさせて頂いた（**写真 5**）。

写真 5　平成 21 年中・四国保育学生研究大会開会式風景（向かって左から２人目が濱田英司）

本番当日を迎えるまでは、事前に司会用に用意して頂いていた原稿を何度も読み返し、文章の読み方や読む時の姿勢、細かい発音など細部に至るまで、まるでアナウンサーにでもなったかのように読み合わせの練習を重ねた。また、開会式や閉会式に出演する

学生同士で何度も進行内容の確認を繰り返したことは今でもかけがえのない思い出の一つとなっている。

限られた期間ではあったが、しっかりと準備をして臨んだ本番当日は、当番校の務めとして学生一人ひとりに役割分担があったため、時間を意識しつつ自分の役割を全うすることで精一杯であった。閉会後、原稿を大きな間違いも無く読み終えたことに安心はできたが、一つひとつの場面においてはほとんど記憶に無く、自分でも気付かないほど緊張していたのだと思われる。ただ、その中でも進行の節々でイベントホールの二階席からも響いてくる拍手の大きさや圧倒されるような会場の迫力は今でも印象に残っており、当時の教職員の皆様をはじめ、学生たち全員で協力して成し遂げたという達成感がとても大きかった。

また、参加者同士の交流を深める目的で、閉会式で披露した手話ソング「ともだちになるために」（作詞：新沢としひこ、作曲：中川ひろたか）では、会場が一体となって歌と手話による参加者の共演が実現し、それぞれ内容の異なる発表をした学生同士が一つのテーマで繋がれるのだという一体感を強く感じた瞬間でもあった。

本学卒業後、保育教諭として現場に立ち、毎日子どもたちと向き合って生活していく中での様々な場面でも、中・四国保育学生研究大会での経験は私にたくさんの勇気と自信を与えてくれた。日々の保育や園行事等で緊張する時も「千人以上の前で話せたのだから大丈夫」「大事なのは上手くやる事よりも伝えようとする事」と自らを時に落ち着かせ、時に奮い立たせていた事が思い出される。

4. 現在の状況・コメント等

下関短期大学保育学科を卒業して早いもので8年目の冬を迎え、現在は保育教諭としての6年間の現場経験を活かし下関短期大学に講師として勤めさせて頂いている。2年ほど前に御縁を頂き、本学で今度は講師として学生の指導に当たる機会を頂いた。これからは本学の一教員として、普段の教育活動の中でも中・四国保育学生研究大会の意義深さを、私自身が経験した様々な視点からより一層本学の学生たちに伝えていくようにしたい。

⑥【平成23年（2011）3月卒業　岡本直樹】

1. 創作発表会について（平成21年：音楽ゼミナール　オペレッタ「アニマル、パーティ」、平成22年：音楽ゼミナール　オペレッタ「南の島のゆかいな仲間たち」）

写真6　平成22年創作発表会「南の島のゆかいな仲間たち」舞台風景（向かって右端が岡本直樹）

私は、2年生の時「南の島のゆかいな

仲間たち」で演奏した「南の島のハメハメハ大王」（作詞：伊藤アキラ 作曲：森田公一）で、大王の奥さん役をしました（**写真６**）。最初は、カツラを付けてスカートをはくことに抵抗がありましたが、無事に演劇を終えることができました。その中で学んだことは「友達と一緒に頑張ることの大切さ」そして「笑顔を大切に」ということです。笑顔で一生懸命頑張り、楽しむことが活動することで大切だと思っています。

⑦【平成24年（2012）３月卒業　井元弥生】

1. 創作発表会について（平成22年：大型紙芝居劇「もうすぐクリスマス」、23年：音楽ゼミナール「オペレッタ　ドコノコノキノコ～おねえさんといっしょ～」）

2. 中・四国保育学生研究大会について（平成23年：松山東雲女子大学　オペレッタ「歌おう！踊ろう！奏でよう！～おねえさんといっしょ～」）

私が中・四国保育学生研究大会に参加したのは２年生の時でした。音楽ゼミナールの木戸純子先生から「中・四国大会に一緒に挑戦しましょう」と声をかけていただき、期待半分、不安半分の気持ちで参加したことを覚えています。先輩方の発表を記録したDVDを観て研究を重ね、研究発表にも様々な方法があることを知りました。そこから自分達の研究したいテーマを絞り込み、その結果「音楽で生きる喜びを伝えたい」というテーマにして、「オペレッタ」を発表することに決定しました。

写真７　平成23年創作発表会「歌おう！踊ろう！奏でよう！～おねえさんといっしょ～」舞台風景
（向かって左が井元弥生、右が山口慧）

まず、子ども向けＤＶＤをみて耳に残り、興味を惹く楽曲選びからスタートしました。その時、発表作品の題名となった「ドコノコノキノコ」（作詞：もりちよこ、作曲：ザッハトルテ）という楽曲に出会いました。楽曲に合わせて子どもたちに喜んでもらえるよう物語を考え、多種類の楽器演奏、創作ダンス、物語中に食育をさりげなく盛り込み、起承転結をどのように表現するのか試行錯誤をした結果、一つの作品を作り上げることができました。「子どもたちのために」と頑張ってきた全てが今もなお、保育に役立っています。それは「自分たちのため」でもあったことに気がつくことができました。自分たちの作品を大勢の人の前で発表出来たことやその作品について講評していただいたことで、更に良いものを目指していこうと意欲を高める結果に繋がったと思います。創作発表会の舞台は、この中・四国保育学生研究大会の経験を基に改良して、発表をしました（**写真７**）。この大会に参加できたことは私の人生において、

とてもよい経験であり、色あせることのない素敵に思い出になっています。

⑧【平成 24 年（2012）3 月卒業　阿保（旧姓：山口）慧】

1. 創作発表会について（平成 22 年：オペレッタ「南の島のゆかいな仲間たち」、23 年：音楽ゼミナール「オペレッタ　ドコノコノキノコ～おねえさんといっしょ～」）

2. 中・四国保育学生研究大会について（平成 23 年：松山東雲女子大学　オペレッタ「歌おう！踊ろう！奏でよう！～おねえさんといっしょ～」）

写真 8　平成 23 年創作発表会「ぱわわぷ体操」舞台風景

2 年生の時、音楽ゼミナールとして、NHK「おかあさんといっしょ」の曲をメドレーで発表しました。台詞を考え、オリジナル・ストーリーを作りました。15 名で楽器演奏・ダンス・歌・縫いぐるみなど、それぞれ役割を決め、ステージに立ちました。最後には、お客さんと一緒にダンス「ぱわわぷたいそう」（作詞：平方宏明 、作曲：堀井勝美）を披露し、会場がひとつになった感覚を今でも覚えています（**写真 8**）。

保育士・幼稚園教諭という仕事は、時に人前に立つ役者であり、恥じらいを捨てなければなりません。学生時代にステージに立つ経験をする事で、実際の保育の場でも自信をもって子ども達の前に立つことができたように思います。下関短大の持つ温かさ、少人数ならではの一体感が良い発表会につながったのだと今、思い出しながら心が温かくなっています。

4. 現在の状況・コメント等

平成 28 年（2016）4 月で、幼稚園を退職。結婚し、今年 7 月に長男を出産して現在、他県に住んでいます。大好きな「下短」の発表会が成功しますよう、祈っています。

⑨【平成 24 年（2012）3 月卒業　小柳絢】

1. 創作発表会について（平成 22 年：音楽ゼミナール　オペレッタ「南の島のゆかいな仲間たち」、23 年：食育表現ゼミナール「大型紙芝居　山口さんちのある一日」）

2 年生の時、大型紙芝居を制作して発表しました。1 年生の時は音楽ゼミナールに所属していたので、初めて大型紙芝居を作りました。最初は、ゼミナールの仲間でそれぞれ台本を考える人、紙芝居の下絵を考える人、と分業していましたが、最後には紙芝居の色塗りをみんなでしました。紙芝居は模造紙を使ったので大きく、色塗りに時間がかかりました。紙芝居劇は、

紙芝居を作って終わりではなく、完成後に劇の練習がはじまります。放課後、先生の部屋や教室に残って色塗りをしたり、練習したりしましたが、楽しかった事を覚えています。本番は、練習の甲斐もあって大成功し（**写真9**）、終わった後は、みんなで「良かったね！」と喜び合いました。

写真９　平成23年創作発表会　大型紙芝居劇舞台風景
（向かって左から３人目が小柳絢）

私がこの紙芝居劇のために作詞・作曲した「100%ハッピーパワフル」は、子ども達に興味を持ってもらえたようで、舞台でみんなが歌っている時、子ども達は一生懸命、ステージを観てくれていたことを昨日のことのように覚えています。

4. 現在の状況・コメント等

私は今、音楽業界の仕事に就き、日々、音楽に囲まれて過ごしています（パソコンでの音源入力・レコーディングの手伝いなど）。自分で曲を作り、詞をのせる楽しさを今の仕事でも学びながら続けていきたいと思っています。

⑩【平成25年３月卒業　前田（森川）亜弥香】

1. 創作発表会について（平成23年：音楽ゼミナール「オペレッタ　ドコノコノキノコ～おねえさんといっしょ～」、24年：縫いぐるみショー「ムテキチの誕生日会」）

私にとって、創作発表会が在学中の一番、大きなイベントでした。自分の選んだゼミナールに所属し、１年生の時は音楽ゼミナールでオペレッタ、２年生の時には縫いぐるみ劇を発表しました。１年生の時は、ゼミナールの先生と先輩にリードして頂きながら、子ども達の好きなNHK「おかあさんといっしょ」やテレビアニメでお馴染みの曲を沢山、参考にしてショーを作りました。放課後や授業の空き時間に自主的に集まって毎日、朝早くから夕方遅くまで歌や楽器の練習をしました（**写真10**）。更にその合間に舞台の大道具・小道具や衣装の制作もこなしました。とても大変でしたが、仲間と力を合わせて一つのものを作り上げるということは、発表までの忙

写真10　平成23年　音楽ゼミナール「オペレッタ　ドコノコノキノコ」練習風景（於：本学Ｃ棟３階ホール、前列向かって左端が森川亜弥香）

しい時間さえもワクワクして楽しかったことを記憶しています。

発表会本番は、とても緊張します。学校で、友達や先生の前で発表するのとは違って、子どもや保護者を目の前にすると、とても緊張しました。しかし、楽しみにしてくれている子ども達の顔、知っている曲が流れた時の嬉しそうな笑顔をみると、私達の気持ちも自然と盛り上がって最後まで楽しみながら発表を行うことができました。

発表が終わったあとの達成感、それを分かち合う仲間がいることは、それまで大変だったことを全て忘れるくらい大きな宝物となります。私は創作発表会のお陰で、楽しい思い出と素晴らしい仲間を得ました。

この経験は、今の私の生活にも活かされています。2人の子どもを育てる中で、「どうしたら子ども達が喜ぶかな？」と考え、そのアイディアを蓄えている引き出しが沢山あるので、選びながら子育てをしていくのがとても楽しいです。

保育学科の短大生活はとても短いです。しかし、この短い間に内容の濃い体験ができるのが保育学科の良さだと思います。是非、現役の学生やこれから保育の道に進む人に「学生でしかできない貴重な体験」を沢山して欲しいです。

⑪【平成25年3月卒業　三牧由貴】

1. 創作発表会について

（平成23年：影絵「おおかみなんかこわくない」、平成24年：影絵「どうぞのいす」）

第30回創作発表会おめでとうございます。私は、2年間、野中宏司先生（現在学長、当時保育学科教員）のゼミナールに所属し、影絵を発表した思い出があります。1年の時には、「ステージ発表しないゼミナール」と聞いていたので、心の中で「よしっ！」と思っていました。何がきっかけでステージ発表することになったのか忘れましたが、「顔を出さなくてよいから」と複数あった候補の中から影絵を発表することになったように覚えています。

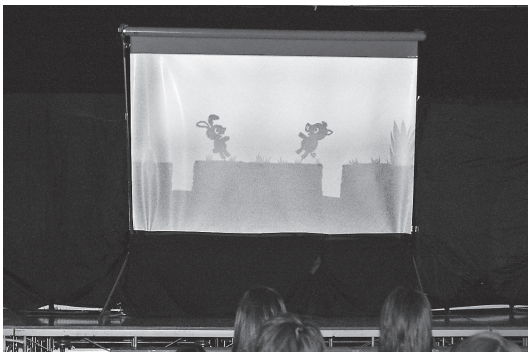

写真11　平成23年創作発表会　影絵「おおかみなんかこわくない」舞台風景

正直なところ、初めは「面倒くさい」と思っていました。何も分からない所からのスタートだったので、文字が左右反対に映写されたり、動物を作ったはずが切る所を間違えて動物に見えなくなったり、不器用な自分に何度もイライラしました。しかし、先輩や同級生と少しずつ完成に向けて取り組んでいる内に「楽しい」と感じられるようになり、練習場所だった本館地下教室に行くのが楽しみになっていたことを覚えています（**写真11**）。

２年生になり、もう１度、影絵がやりたくて同じゼミナールに所属しました。題材にする絵本を探し、台本を何度も先生に相談しながら作ったので、もしかすると先生から「しつこい」と思われていたかもしれません。また、準備を進めていく中で一番困ったことが、後輩とコミュニケーションをとることでした。私は、話すことが苦手だったので、できる限り喋らないように逃げていました。「もう少し、仲良く喋れたら良かったなあ」と今なら思います。

写真 12　第 30 回創作発表会「つくって！わくわく！―遊び・工作体験ブース―」
（後列向かって右端が三牧由貴）

自分が参加した２回の創作発表会を振り返ると、みんなで協力して作る大変さ、楽しさ、成功した喜びを味わうことが出来ていたのだと思います。また、周りの環境を整えて下さった先生方や一緒に取り組んだ同級生に恵まれていたことを社会に出た今だからこそ感じられるようになり、感謝の気持ちでいっぱいです。後輩には、今しかできない経験を大切にして、沢山の思い出を作って欲しいと思います。

4. 現在の状況、コメントなど

現在、下関短期大学付属第一幼稚園に勤務しています。第 30 回の創作発表会には卒業生（合計５名）による「つくって！わく　わく！―遊び・工作体験ブース―」に参加する予定です。子ども達、そして来場者の方々に楽しんで頂きたいと思っています（**写真 12**）。

3　アンケート回答と今後について（担当教員：堀尾昇平・高杉志緒）

以上、本稿では、保育学科卒業生を対象とした創作発表会を中心としたアンケート回答を中心に報告を行った。卒業生達の記述内容は、次のように大別できる。

1）準備の過程・発表直後・現在に至る気持ちの変化：困難→喜び・達成感→感謝・充実感

2）学生同士の人間関係について：切磋琢磨・協働作業の重要性

3）体験の特殊性：学生時代のみの体験、一般的な授業とは異なる現場体験（観客の前で発表）

以上３つである。特に 3）については、「学生でしかできない貴重な体験」（森川）、「今しかできない経験」（三牧）と「創作発表会」が個人史的（自己の生涯）な観点において特異な位置を占めていると２名が記している。同時に個人的な観点だけでなく、「本学独自の素晴らしいイベント」（Ｈ・Ｉ）、「下関短大の持つ温かさ、少人数ならではの一体感」（阿保）と２名が本学独自の行事と指摘していることは注目に値しよう。

また、「職種が違っても役に立ち感謝しています」（香西）、（創作発表会の体験を通じて得

第 30 回 下関短期大学保育学科創作発表会 発表内容

ロビー展示　11 時 30 分～15 時
乳幼児支援研究ゼミナール　ポスター展示発表
「地域における子育て支援の実際から学ぶこと　―こども館、児童館、障がい児通所指導サービス事業所の視察とインタビューを通して―」

卒業生有志　特別参加コーナー
「みんなで遊ぼう　―玩具・折り紙・工作体験―」

午前の部　研究発表　11 時 30 分～12 時
心理ゼミナール　口頭発表
「母親と父親の育児の現状と想いについて
―家庭の声を聴いて育児に関する想いを知ろう―」

午後の部　ステージ発表　13 時 30 分～15 時 30 分
☆オープニング・アクト　下関短期大学付属高校保育コース
手袋シアター「季節の歌・童謡・手遊び歌」

1　影絵ゼミナール　影絵「ヘンゼルとグレーテル」

2 保育表現ゼミナール 寸劇「四季の壁面を作ろう」

3 縫いぐるみゼミナール 縫いぐるみ劇「アンパンマンの誕生日」

4 音楽ゼミナール 及び 中･四国保育学生研究大会参加学生
合奏・大型絵本表現「はらぺこあおむし」

5 卒業生　特別ステージ　縫いぐるみ劇
「しあわせのうたを探しに行こう―望郷編―」

（発表援助・運営演習）縫いぐるみ･ブラックシアター

図 3　平成 29 年 第 30 回創作発表会発表内容（式次第）

た）「楽しさを今の仕事でも学びながら続けていきたい」（小柳）と述べ、保育職以外に就いている卒業生にも在学時の体験が役立っていることが窺える。本学保育学科では、地域貢献・保育者としての相応しい資質の育成、この 2 つを主軸として「創作発表会」を行ってきたが、今回の卒業生のアンケート回答によって「保育者としての学び」という側面だけでなく「能動的学修」「体験学修」と総合的に捉えていることが分かった。

今後も「創作発表会」を通じた能動的な学修（アクティブ・ラーニング・発見学修・問題解決学修・体験学修）を展開しながら地域貢献を進めることを課題としたい。

更に、第 30 回の舞台では、「オープニング・アクト」として、下関短期大学付属高校（保育コース）の生徒が参加することとなった（**図 3**）。従って今後、「高大接続」という面においても創作発表会のあり方を考えたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、アンケートに回答して下さった卒業生（敬称略・五十音順、匿名希望者 1 名はイニシャルで記載：阿保 (山口) 慧・H.I.・井元弥生・岡本直樹・香西由里子・小柳絢・冨松（徳松）成江・冨松豊・戸高翔太・前田（森川）亜弥香・三牧由貴・濱田英司）に対し、記して深甚の謝意を表します。

注）参考文献・論文

(1) 堀尾昇平：「児童研究部」における社会的活動，下関短期大学紀要，30 号，2012 年 3 月